

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター

北海道大学愛努・先住民研究中心

Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University

常本照樹 北海道大学アイヌ・先住民研究センター長

黃柏豪 翻譯

北大センターの誕生

2007年4月に北海道大学に「アイヌ・先住民研究センター」が開設された。多文化が共存する社会において、総合的・学際的研究に基づきドミナント社会と先住少数民族との互惠共生に向けた提言を行うとともに、研究成果を社会に還元する事業を展開し、アイヌ・先住民文化の理解の推進を図ることがセンターの目的であり、そのために後述するような各種の事業を行うこととしている。

北大は、特にアイヌ語、北方文化研究等で先駆的な業績を持ち、先住民族の法的地位に関する研究を通じて政府や自治体に助言や提言を行ってきた実績もあるが、それらの相互連携が取れておらず、総合的・学際的研究を実施できる体制にはなかった。このような状況を変えたのが中村睦男総長（2001/5～2007/4）の登場であった。憲法学を専門とし、アイヌ施策にも長く関わってきた中

北大中心の誕生

於2007年4月在北海道大學成立了「愛努・先住民研究中心」。中心的目的為在多文化共存的社會當中，對支配社會與先住的少數民族之間提出基於綜合的、跨學科的研究並且有助於其互惠共生的意見，在此同時展開將研究成果還原於社會的事業，嘗試推廣對愛努・先住民文化的理解。

北大在愛努語、北方文化研究當中擁有領先的業績，雖也有通過關於對先住民族的法律地位研究來對政府及自治體提出建議和看法的實際成績，但彼此之間並沒有相互的合作關係，也沒有可以總和各學科間研究的體制存在。而改變這一個狀況的便是中村睦男總長（舊制帝國大學的校長）（2001/5~2007/4）的登場。以憲法學為其專門，也有相當長的時間參與愛努政策問題的中村

村総長は、「北海道に立地する国立総合大学として、アイヌ民族を初めとする北方諸民族に関する教育研究を充実させることは、北海道大学の責務であり、世界における諸民族・諸文化の平和的共存に資するものである。」と宣言し、先住少数民族の全国的・国際的な研究教育センターの設置を指示した。こうして、国立の教育研究機関として初めて「アイヌ」の名を冠するセンターが誕生したのである。

三つの特徴

センターの第一の特徴は、その学際性にあり、哲学、文化人類学、歴史学、考古学、言語学などの人文諸学はもちろん、法学、社会学、教育学などの社会科学、そして環境科学などの自然科学や博物館学などの専門家をもメンバーとするなど、総合大学の強みを十分に発揮できる構成となっている。この学際的構成を生かしてアイヌ・先住民文化の総合的研究を行うとともに、その法的権利についても研究を進め、その客観性と専門性を生かし、国・自治体と民族の双方に提言できる組織となることを目指している。

第二のセンターの特徴は、アイヌ民族との協同を基本方針としていることである。この方針は、まずセンターの運営委員会に2人のアイヌ民族の代表が参加しているという点に現れている。これは日本の研究教育機関として初めてのことである。また、

校長、宣言了「做為一個立地於北海道的國立大學，充實以愛努民族為始的對北方諸民族的相關教育研究是北海道大學的責任與義務，並且也是對世界各民族與文化之間的和平共存的貢獻。」，並下指示設置了全國性、國際性的先住少數民族研究教育中心。做為一個國立的教育研究機關，首次冠以「愛努」之名的中心就這樣誕生了。

三個特徵

中心的第一個特徵在於它跨學科間的構成，除了哲學、文化人類學、歷史學、考古學、語言學等等的人文學科之外，法學、社會學、教育學等等的社會科學，以及環境科學等的自然科學和博物館學的專家也是中心的成員，為一個可以充分發揮綜合大學的強處的組成。在藉由活用此一跨學科間的組成對愛努・先住民文化行綜合性的研究的同時，也研究其在法律上的權利，活用其客觀性與專業性，以成為一個對國家、自治體與民族兩方皆可提出意見的組織為目標。

中心的第二個特徵為，以和愛努民族的合作作為基本方針。此方針首先表現於兩位愛努民族的代表參加了中心的營運委員會。這在日本的研究教育機構中也是第一次。並且在研究面上也有愛努族人做

研究面でも、アイヌが研究メンバーとしてセンターに参加し、自らの関心に従って、あるいはセンターの事業に協力して研究活動を行う道を開いている。こうして自分たちの民族の権利や文化を自分たちで研究するという、世界ではあたりまえになっている研究のあり方を、日本でも実現していきたいと考えている。北大には、かつて知里真志保博士という偉大なアイヌ民族出身の研究者が存在した。第二、第三の知里博士を生み出すことがセンターの重要な使命の一つというべきであろう。

そして第三の特徴は、研究センターという名前ではあるが、教育も重視するところにある。まずなにより、将来の北海道、そして日本のリーダーとなるべき北大の学生に、アイヌ・先住民について正確な理解と関心をもたせるべく、各種の授業を展開する。そして中学・高校におけるアイヌ・先住民に関する教育の充実のために、現場の先生方と協力しながら教材及び教育プログラムを作成するとともに、授業の中で生じる疑問に対応できるような体制を作る予定である。さらに、北大キャンパスはもとより、北海道内各地において様々な講演会やシンポジウム等を開催し一般にも公開している。このような教育活動を通じて、アイヌ・先住民に関する理解を深め、差別の解消と日本における多様な文化の発展に寄与したいと考えている。

為研究成員參與本中心，以基於個人的關心或以協力發展本中心的事業為目的，來開創他們研究活動的道路。並且我們也欲在日本實現「自己民族的權利與文化由自己來研究」此一在世界各地已被廣泛接受的研究基本概念。且在北大過去有知里真志保博士這一位出身愛努民族的偉大研究者，而培養出第二、第三的知里博士也可說是本中心的重要使命之一。

再者第三個特徵，雖然名為研究中心，但也是個重視教育的場所。首先開設各種的課程以讓應該會成為北海道以及日本的未來領導者的北大學生對愛努・先住民有正確的理解與關心。為了充實在國中、高中時與愛努・先住民相關的教育，在與教育現場的老師們共同協力製作教材以及教育課程的同時，也預定創立可以對應課程中所產生的疑問的體制。並且，除了北大校園以外，時常在北海道內各地主辦各式各樣公開的演講會與研討會。本中心欲通過這些教育活動，在加深對與愛努・先住民相關的理解，幫助消除歧視與促進日本的多樣文化發展等層面做出貢獻。

一本の苗木から

これら以外にもセンターが果たすべき役割は数多いが、センター専任のスタッフは1人しかおらず、活動の多くは、センター長を含む12人のメンバー（兼務教員）が、本来の教育研究の傍ら担わざるを得ない。日本のトップクラスの国立基幹総合大学の中にセンターがあるということは、多様な専門家の力を結集することが出来るという強みがある反面、様々な制約があることも意味する。ほかの国々の同種のセンターは先住民学生の支援という重要な任務を果たしているが、日本においては国立大学の入試制度の壁が厚く、正規の学生として入学することが容易ではない。

かつてアイヌ出身の初の国会議員となった萱野茂氏は、アイヌ文化振興法制定の際に、法律の内容は十分とは言えないが、一本の苗木を植えることで枝葉がつき、花を咲かせることもできると語った。アイヌ・先住民研究センターも十分な体制とはいえないが、ようやく北の大地に植えられた一本の苗木として、これから台湾の政治大学原住民族研究中心をはじめとする国内外の研究教育機関や行政機関、民族団体などと協力しながら、枝葉を延ばし、花を咲かせていきたいと願っている。

センター事業の紹介

最後にセンター事業の一部を紹介しよう。ま

従一棵樹苗開始

除了這些以外，中心該達到的作用還有相當多，但中心專任的職員只有一人，許多活動都不得不由包含中心主任的12名成員（兼務教員）在本來的教育與研究之外來另外負擔。在日本頂尖的國立基幹綜合大學中設立中心這一件事本身，雖然有可以集合各種專家的力量此一強處，但也意味著有各種制約存在。其他國家的同種的中心達成了支援先住民學生這一項重要的任務，但在日本國立大學的入學考試制度的牆壁很厚，做為一個正規的學生入學這件事本身相當的不容易。

過去做為第一個愛努民族出身的國會議員的萱野茂先生，在制定愛努文化振興法之時談到，法律的内容雖說不上充分，但藉由種下一棵樹苗可以長出枝葉，也可以開出花來。愛努・先住民研究中心雖也說不上是一個充分的體制，但做為一棵終於能在北方大地植下的一棵樹苗，此後也願能在和以台灣的政治大學的原住民研究中心為始的各國內外研究教育及行政機關、民族團體間等共同協力的同時，一邊伸展枝葉，綻放花朵。

中心事業的介紹

最後介紹一部分中心的事業。首先以

ず毎月1、2回のペースでアイヌ民族の文化伝承に携わっている方々や先住民族に関する国内外の研究者・実務者を招いて講演会・研究会を行うとともに、毎年、夏季に国際ワークショップ（今年度は台湾原住民族法制をテーマに開催）、冬季に国際シンポジウム（今年度は10周年を迎えたアイヌ文化振興法の総合的検討をテーマとする予定）を開催することになっている。また、プロジェクト事業として、前述の教材・教育プログラムの作成のほか、アイヌ民族の権利の具体的実現のための権利戦略の研究、新しいアイヌ史・北海道史の構築、先住民族エコツーリズム、アイヌ語データベースの作成、アイヌ民族に関する学術的実態調査などの活動が順次スタートしている。

130年余にわたる北大の歴史の中には、アイヌ民族との関わりにおいて大学としての姿勢が問われる問題があったことは否定できない。これらの経験を深く記憶に刻み、そのうえで、多くの民族が互いに理解し合い、支え合って共生できるような未来に向けた活動を進めていくのが当センターの責務ではないかと考えているところである。



毎月一～二次的歩調邀請參與愛努民族的文化傳承的先進與相關於先住民族的國內外研究者、實務者來進行演講會、研究會（讀書會）的同時，並在每年的夏季舉辦國際工作坊（本年度以台灣原住民法制為主題來主辦），冬季舉辦國際研討會（今年預定以邁入十週年的愛努文化振興法的綜合檢討為主題）。且做為研究企畫事業，在製作前述的教材、教育課程之外，對於具體實現愛努民族權利的權利戰略研究、新的愛努民族史、北海道史的建構、先住民族生態旅遊、愛努語資料庫的製作、關於愛努民族的學術性實態調查等等的活動也依序起跑中。

在橫跨130餘年的北大歷史中，我們不能否定在和愛努民族的關連間，北大做為一個大學的姿態曾有過問題。把這些的經驗深深刻在記憶當中，並且朝向許多民族間可以相互理解，彼此支撐並能共生的未來邁進，不正也是本中心的責任與義務嗎？本人正在這麼想。

◀ 本文作者與政大原住民族研究中心林修澈主任於北海道大學愛努・先住民研究中心前合影。